

陸九淵とその初伝の門弟 —— 傅夢泉と楊簡を中心に ——

Lu Jiuyuan and His Immediate Pupils: Fu Mengquan and Yang Jian

中 嶋 諒

Ryo Nakajima

日本語要旨

本稿は、陸九淵から高くは評価されなかったものの、後世への影響力がとりわけ大きい楊簡と、陸九淵に最も嘱望されながら、後世その名が殆ど伝わらなかつた傅夢泉という、性格の異なる二人の人物を取り上げて、陸九淵初伝の門弟達の思想状況を多角的に捉えたものである。ただし傅夢泉にはまとまつた著述が残されているわけではなく、いま『象山全集』等にその断片が散見するのみである。そこで本稿では、傅夢泉についての僅かな資料を足掛りとして、それに関連する陸九淵や楊簡の言葉に及んでいくという方法を採用した。

それにより、まずは自己の心に信頼を寄せつつも、その一方で自らへの執着を戒めるといふ発想が、陸九淵やその門弟達に共有されていたことを明らかにした。けれども傅夢泉にしろ楊簡にしろ、多かれ少なかれ、実践修養の段階を蔑ろにする傾向があった。これは陸九淵その人の思想からは逸脱したものであり、現に陸九淵は傅夢泉に対して苦言を呈している。陸九淵に

は、門弟達が速習に流れることを警戒する意向があつたのである。

1. はじめに

陸九淵（象山、一一三九～一一九二）の門弟の中で、後世への影響力も含めて、その名が最も知られているのは楊簡（慈湖、一一四一～一二二六）であろう。しかし陸九淵と楊簡の交流は意外と少なく、また陸九淵は名指しで楊簡を批判することすらあつた¹。楊簡は終生陸九淵を師として慕っていたようであるが、陸九淵には必ずしもこのような意識はなかつたようである。その一方で、陸九淵がとりわけ嘱望した門弟は、傅夢泉（子淵、生没年未詳）であつた²。

先生は門人の中では、傅夢泉（子淵）を最も嘱望されていた。（先生於門人、最屬意者唯傅子淵。）『象山全集』卷三四、「語録」上・172条、嚴松録／420頁

嚴松が先生に質問した。「昨今の学ぶ者と云えば、誰でしよ

うか。」先生は指折り数えて、傅夢泉（子淵）が第一、鄧約礼（文範）が第二で、傅子雲（季魯）、黃日新（元吉）がさらにそれに次ぐとされた。（松問先生、今之學者為誰。先生屈指數之、以傅子淵居其首、鄧文範居次、傅季魯、黃元吉又次之。）」『象山全集』卷三四、「語録」上・181条、巖松録／422頁

右の二つの言葉を見る限り、陸九淵はこの傅夢泉なる弟子を、手放しに称賛していたようにさえ見受けられる。

さてこれまでの研究では、陸九淵の門弟として楊簡が取り上げられることは間々あった。けれども傅夢泉についての専著専門は皆無といってよい。もちろんこれは、現存する資料の多少に由来しているとは言えよう。楊簡の著作は数多く現存するのに対して、傅夢泉はその事績すらほとんど明らかでない。しかしだからといって、楊簡を陸門の代表格に据えることには、些かの危険を感じる。陸九淵の立場に立てば、傅夢泉こそが門弟の筆頭に挙げられるべき人物だからである。

本稿は、陸九淵から高くは評価されなかったものの、後世への影響力がとりわけ大きい楊簡と、陸九淵に最も囑望されながら、後世その名が殆ど伝わらなかつた傅夢泉という、性格の異なる二人の人物を取り上げて、陸九淵初伝の門弟達の思想状況を多角的に捉えたい。これはまた当時隆盛を極めた陸九淵門下における、思想の最大公約数をすくい取る試みともなるであろう。そして以上のような手続きを踏んだ上で、改めて陸九淵の思想に立ち返り、その特色を明らかにしてみたい。

ただし傅夢泉にはまとまった著述が残されているわけではなく、いま『象山全集』等にその断片が散見するのみである。そ

こで本稿では、傅夢泉についての僅かな資料を足掛りとして、それに関連する陸九淵や楊簡の言葉に及んでいくという方法を採りたい。

2. 艮卦の解釈

まずは傅夢泉に関わるものとして、以下の資料に着目してみたい。

傅夢泉がお教えを、一語で簡潔にと請うた。陸九淵「其の背に艮^とまり、其の身を獲^えず。其の庭に行き、其の人を見ず」だ。「傅子淵請教、乞簡省一語。答曰、艮其背、不獲其身。行其庭、不見其人。」『象山全集』卷三四、「語録」上・86条、傅子雲録／406頁

さてここで陸九淵は、傅夢泉にその教えを簡潔にまとめるようにと請われ、そこで『周易』艮卦の卦辞を挙げる⁴。ただしこれだけでは陸九淵の真意は汲み取り難いので、その艮卦の解釈に関わる別の発言を見てみたい。

陸九淵（復齋）が、程頤（伊川）『易伝』の「其の背に艮まる」の解釈を読み、私に質問した。陸九淵「程頤の解釈はどうかね。」陸九淵「曖昧な解釈です。」そこで私に説明させた。陸九淵「其の背に艮まり、其の身を獲ず」は、我が無いこと。「其の庭に行き、其の人を見ず」は、物が無いことです。「復齋看伊川易伝解艮其背、問某、伊川説得如何。某云、説得鶻突。遂命某説、某云、艮其背、不獲其身、無我。行其庭、不見其人、無物。」『象山全集』卷三四、「語録」上・169条、巖松録／419頁

これは陸九淵がその兄九齡と、程頤『易伝』艮卦の解釈をめぐる議論を交わした記録である。ここで陸九淵は、「其の背に良まる」云々を「我無し（無我）」、「其の庭に行く」云々を「物無し（無物）」と説明する。また同様のことは、以下の記事からも窺える。

傅夢泉が初めて（陸九淵）先生にお教えを請うた時、「背に良まる」「庭に行く」「我無し」「物無し」の説を賜わった。その後傅夢泉は言った。傅夢泉「私が張栻（南軒）、朱熹（晦翁）門下にあつた時、両者の説に妨げられて、十年間先生の説を間違いだと考えていた。けれども教えを衡陽に分かつこと三年、ようやく信じることになった。」〔初子淵請教先生、有良背、行庭、無我、無物之説。後子淵謂、「某旧登南軒、晦翁之門、為二説所碍、十年不可先生之説。及分教衡陽三年、乃始信。」〕『象山全集』卷三四、「語録」上・172条、巖松録／420頁

ここでも陸九淵が艮卦の卦辞をもって、傅夢泉に教えを授けたことが言われている。なおこの資料から明らかかなように、傅夢泉はかつて朱熹や張栻の門下にもあつた。ただともかく、このような紆余曲折を経つつも、この「我無し」「物無し」こそが、傅夢泉のようによく信じることできた陸九淵の教説とされている。

さらに陸九淵の艮卦の解釈については、以下の記事も参照されたい。

己れがあれば理を忘れ、理を明らかにすれば己れを忘れる。「其の背に良まり、其の身を獲ず。其の庭に行き、其の人を見ず」は、理に任せて、己れと人を交えないことである。

〔有己則忘理、明理則忘己。良其背、不見其身。行其庭、不見其人、則是任理而不以己与人参也。〕『象山全集』卷三五、「語録」下・356条、黄元吉録／473頁

ここでは艮卦の解釈が、より具体的に「理に任す」こと、「己れと人とを以て交へざる」ことの二点で説明される。また理と己れの関係については、以下の資料が参考になる。

この理は宇宙に充ち満ちており、天地や鬼神すらこれに違ふことはできない。ましてや人は尚更である。本当にこの理を知れば、彼や己れといった個々人（の区別）は無くなくなるであろう。他人の善事も、我がことの如くなる。〔此理充塞宇宙、天地鬼神、且不能違異。況於人乎。誠知此理、当無彼己之私。善之在人、猶在己也。〕『象山全集』卷一一、「与吳子嗣」八／147頁

以上、幾つか資料を列挙したが、これらから分かることは、陸九淵はひたすら理に従って、己れと人との境界を取り払うことを求めている。言葉を換えれば、自らに執着することなく、理の当然に合致した事柄であれば、それが誰の行為であっても構わないということであろう。

ただ以上のような陸九淵の艮卦の解釈は、その好敵手であった朱熹（朱子、一一三〇～一二〇〇）のそれと、さしたる相違が窺えないとも言える。例えば朱熹は、以下のように述べている。

「其の背に良まる」とは、ひたすら道理はかくの如くであるべしと理解して、僅かの自己も容れず、些かの私意も着けないことである。〔良其背、渾只見得道理合当如此、入自家一分不得、著一些私意不得。〕『朱子語類』卷七三・47条、

晏淵録／五・185頁

ここでは「其の背に良まる」の一句をもって、道理に従い、私意を介入させないことが言われるが、これは前述した陸九淵の「理に任ず」、「己れを忘る」といった立場と軌を一にする。とはいえ前述の通り、傅夢泉は陸九淵の艮卦の解釈を授けられながら、それを朱熹、張栻の二説に妨げられた為に、信じることでできなかったのであるから、やはり陸九淵と朱熹双方の理解には、何らかの差異があったと考えなければならぬであろう。ところで陸九淵は理について、以下のように述べている。よく知られた資料ではあるが、ここで敢えて引いておきたい。

四端は、この心である。天が我に付与したものは、この心である。人には皆この心があり、心には皆この理がある。心は即ち理である。それ故（『孟子』告子上に）「理義の我が心を悦ばすは、猶ほ芻豢の我が口を悦ばすがごとし」と言う。学を貴ぶ者は、この理を窮め、この心を尽くそうとする。塞がる所、奪われる所、陥る所があつては、この心に靈妙ならざる所が現れ、この理は明らかでなくなる。「四端者、即此心也。天之所以与我者、即此心也。人皆有是心、心皆具是理、心即理也。故曰、理義之悦我心、猶芻豢之悦我口。所貴乎学者、为其欲窮此理、尽此心也。有所蒙蔽、有所移奪、有所陷溺、則此心有所不靈、此理為之不明。」

『象山全集』卷一一、「与李宰」二／149頁

人の心には理が備わっている。したがって理を窮めることは、また自らの心を尽くすことにもなる。この理を備えた心を尽くすことにより、かえって自らへの執着から自由になること、これこそを陸九淵は求めていたのではないか。すなわち理を介し

て己れを排除すること自体、陸九淵と朱熹に変わりはない。けれどもその理の在り所を自らの心に置くか否かが、両者の相違であつたと言えるであろう。

その一方で、楊簡が陸九淵より授けられた教えは、如何なるものであつたのであろうか。ここでは陸九淵、楊簡双方の側からの資料を、それぞれ挙げておきたい。

陸九淵（象山）先生よりお教えを賜わるにあたり、先生は扇の訴訟の是非を取り上げられたが、そこで忽ち簡の心は、かくの如く清明虚靈、妙用泛応にして、非の打ち所のないものだど覚つた。「及承教於象山陸先生、聞拳扇訟之是非、忽覚簡心乃如此清明虚靈、妙用泛応、無不可者。」『慈湖遺書』卷七、「汎易論」／30丁裏

乾道八年（一一七二）、陸九淵は当時浙江富陽の主簿であつた楊簡のもとを訪れる。そこで楊簡は陸九淵に教えを請うて、自らの心が清明妙用にして、非の付け所のないのだと悟つたという。同一場面と思しき記録は、楊簡の文集『慈湖遺書』中に幾つか見えるが、より具体的な問答の内容としては、以下の陸九淵の側の資料が参考になる。

楊簡（敬仲）「本心とは如何なるものでしょうか。」陸九淵「惻隱は仁の端、羞惡は義の端、辞讓は礼の端、是非は智の端、これが本心である。」楊簡「そんなことは簡が子供の時から知っています。結局本心とは如何なるものでしょうか。」何度も質問したが、陸九淵は最後までこの説を変えず、楊簡も納得しなかつた。そこで偶々扇売りの訴訟があつたので、楊簡は法廷でその曲直を判決し、その後また始めの如く陸九淵に質問した。陸九淵「扇売りの訴訟に対

する判決を聞いていたが、正しいことは正しいと知り、間違いは間違いと知ること、これこそ敬仲の本心だ。」忽ち楊簡は大いに悟り、始めて北面して弟子の礼を取った。（楊簡問、如何是本心。先生曰、惻隱仁之端也、羞惡義之端也、辭讓礼之端也、是非智之端也、此即是本心。対曰、簡兒時已曉得、畢竟如何是本心。幾數問先生終不易其說、敬仲亦未省。偶有鬻扇者訟至於庭、敬仲斷其曲直訖、又問如初。

先生曰、聞適來斷扇訟、是者知其為是、非者知其為非、此即敬仲本心。敬仲忽大覺悟、始北面納弟子礼。』『象山全集』卷三六、「年譜」乾道八年／487頁

楊簡は陸九淵に対して、『孟子』に見える本心の語の具体的内容について質問する。そこで陸九淵は、同じく『孟子』に載せる四端の説をもって返答するが、楊簡はそれに不服であったようである。ただそこで楊簡は、偶々抱えていた訴訟の判決を下す。そして陸九淵は、その判決に事寄せて、さらに本心について説明する。すなわち法廷において楊簡が、是なることを是、非なることを非と判断したこと、言葉を換えれば、訴訟の正誤を見極めたことを本心に拠るとしたのである。このような働きを持つが故に、人の心は非の付け所のないものであった。

さてこのように陸九淵との出会いによって、自らの心が清明妙用なることを悟った楊簡であったが、その一方で、この心の正しさは自らに執着することにより損なわれると考えていた。楊簡の著作の中で、とりわけ特色ある文章として度々注目されてきた「絶四記」⁵には、以下のようにある。

人の心は自ずと精明、自ずと靈妙なるものである。意が起こつて我が現れ、必や固に妨げられることにより、始めて

その精明さ、靈妙さを失うのである。孔子は日々門弟達と寛いだ中に問答を重ね、穏やかに（意や我を）断ち切るように戒めた。学ぶ者には、凡そ四つの弊害があり、それぞれ意、必、固、我という。門弟達がその中の一つでも抱くと、聖人はこれを必ず断ち切らせた。（『論語』子罕の「子四を絶つ。意母く、必母く、固母く、我母し」の「母」字は、断ち切るという意味の語である。「人心自明、人心自靈。意起我立、必固碍塞、始喪其明、始失其靈。孔子日与門弟子從容問答、其諄諄告戒止絶。学者之病、大略有四。曰意、曰必、曰固、曰我。門弟子有一於此、聖人必止絶之。母者止絶之辞。』『慈湖遺書』卷二、「絶四記」／8丁表

ここでは、人の心は本来靈妙精明なるものであるが、『論語』子罕という意、必、固、我の四者、すなわち私意や我執によって、それが損なわれることが説かれている。以上のように、陸九淵の用いる語（己れを忘る、理に任す等）とは異なるものの、自己の心に信頼を寄せつつも、その一方で自らへの執着を警戒する態度は、基本的には陸九淵と楊簡に一致する。そしてそれはまた、陸九淵に艮卦の解釈を授けられ、それを信じるに至った傅夢泉にも共有されていたと言えるであろう。

3. 弁志

いま一つ、傅夢泉に関わるものとして、以下の資料にも言及しておきたい。

傅夢泉（子淵）が帰郷するにあたって、陳剛（正己）が質

問した。陳剛「陸（九淵）先生は、人にまず何を教えるのだ。」傅夢泉「志を弁別することだ。」陳剛「何を弁別するのだ。」傅夢泉「義利の弁別だ。」傅夢泉の返答は、切実だと言えるね。（傅子淵自此帰其家、陳正己問之曰、陸先生教人何先。对曰、弁志。正己復問曰、何弁。对曰、義利之弁。若子淵之对、可謂切要。）」『象山全集』卷三四、「語録」上・

22条、傅子雲録／398頁

ここで傅夢泉は、陸九淵の教学の第一を弁志、義利の弁である
と答えており、それに対して陸九淵はこの回答を切要なものと
評価している。義利はまた、時に公私とも言い換えられるが、
私利を戒める態度は、先の艮卦の解釈からも窺えるものであっ
た。

なお志をその教学の第一とする発言は、次の陸九淵の言葉か
らも確認できる。陸九淵は簡潔に、以下のように述べている。

学ぶ者は、まずは志を立てなければならぬ。志を立てば、
聡明な師を求めることだ。（学者須先立志。志既立、却要遇
明師。）」『象山全集』卷三四、「語録」上・51条、傅子雲録／
401頁

ただここで併せて注目しておきたいのは、「志既に立てば、却て
明師に遇ふを要す」と、志を立てた後には聡明な師を求めよと、
段階的な教学の方法が述べられていることである。たしかに弁
志は、陸九淵の教説における最優先事項であったわけだが、ま
た次にあるように、師友との親交も同様に、喫緊の課題として
挙げられるのである。

王遇（字は）子合「学問の道においては、何を優先すれば
よいのでしょうか。」陸九淵「師友と親しみ、自己の不善を

取り去ることだ。人の資質には優劣があるので、師友と切
磋琢磨することで、自己の不善を知り、それを改善してい
くのである。」（王遇子合問、学問之道何先。曰、親師友、
去己之不善也。人資質有美惡、得師友琢磨、知己之不善而
改之。）」『象山全集』卷三五、「語録」下・332条、包揚録／470
頁

ところで陸九淵のいう弁志について論じるにあたっては、以
下の記事にも論及しないわけにはいかない。淳熙八年（一一八
一）、陸九淵は江西南康の白鹿洞書院を訪れ、朱熹との再開を
果たす。そこではまた『論語』里仁「子曰く、君子は義に諭り、
小人は利に諭る」の一章を講義したのである。いまその記録
は『象山全集』中に見ることができるので、しばらくこれにつ
いて考察していきたい。

この章は、義利によって君子と小人を分けている。主旨は
明白であるが、読む者がこれを切実なものとして反省しな
ければ、恐らく有益なものとはなるまい。私は常日頃これ
を読んで、痛感しないわけにはいかない。私見を言えば、
学ぶ者は志を弁別しなければならぬ。人の諭る所は習う
所により、習う所は志す所による。義に志せば、習う所は
必ず義にあり、習う所が義にあれば、義に諭る。利に志せ
ば、習う所は必ず利にあり、習う所が利にあれば、利に諭
る。それ故学ぶ者の志は、弁別しないわけにはいかないの
である。（此章以義利判君子小人、辞旨曉白、然読之者苟不
切己反省、亦恐未能有益也。某平日読此、不無所感。窃謂
学者於此、当弁其志。人之所諭由其所習、所習由其所志。
志乎義、則所習者必在於義、所習在義、斯諭於義矣。志乎

利、則所習者必在於利、所習在利、斯喻於利矣。故學者之志不可不弁也。』『象山全集』卷二二、「白鹿洞書院論語講義」／275頁

ここではともかくも志が義、利のいずれに向かうかを弁別しなければならぬと繰り返して述べられる。けれどもまた「義に志せば、則ち習ふ所の者必ず義に在り、習ふ所義に在れば、斯ち義に喻る」云々とあるように、義に志した後にもそれに習い、それに喻るという階梯が残されていることが窺える。もちろんここでは、志と習、喻の段階が「則」字や「斯」字によって接続されていることから、義に志しさえすれば、それ以上に労することなく、自動的に義に習い、喻りうるとされているとも理解できよう。けれどもまた別の資料に拠るならば、陸九淵は必ずしもこのようには考えていなかったように見受けられる。

およそ学ぶ者は、差し当たっては志を論ずるべきで、必ずしも遽かに到達点を論ずるものではない。志す所が正しいか否かは、二人の人物が荊州と揚州におり、その一人が南洋の象牙や犀角について耳にして、そこに行こうと志し、また一人が京華の美しい風俗を耳にして、そこに行こうと志すようなもの。他日に旅程をうかがい、日々努めるが、その向かうところは既にこの時から分かれている。到達点については、年月の長短、工夫の勤怠や緩急、気稟の厚薄や昏明、強柔や利鋭の別があるが、遽かにそれを論ずるべきではない。〔大抵学者且当論志、不必遽論所到。所志之正不正、如二人居荆楊、一人聞南海之富象犀、其志欲往、一人聞京華之美風教、其志欲往、則他日之間途啓行、窮日之力者、所郷已分于此時矣。若其所到、則歲月有久近、工力

有勤怠緩急、氣稟有厚薄昏明強柔利鋭之殊、特未可遽論也。』『象山全集』卷六、「与傅聖謨」／79頁

ここでもやはり、まずは志を論ずるべきことが言われている。やはり学問の出発点にあつて、そもそも向かうところが誤つていては、当然目的地に到達することはできない。それ故差し当たっては、志す所の如何を問題とするべきだというのである。ただしその到達点（喻る所）に至るまでの歳月の多少、工夫の勤怠（習う所）については、「未だ遽かには論ずべからず」とある。もちろん遽かに論じてはならないものの、それを論じること自体を否定しているわけではない。志が定まった後には、例えば師友との親交をもつて、自らの不善を改善していくという段階が必要となる。そこで問題となるのは、その年月の多少や工夫の勤怠であろう。弁志は学問の必要条件ではあるものの、そのみで十分であるとは到底言えないはずなのである。

このことは陸九淵が直接傅夢泉に宛てた次の書簡において、さらに明確に述べられることとなる。

（貴君の）三通の返書は、義利の弁について、明らかであると言える。孔夫子は「君子は義に喻り、小人は利に喻る」と言い、孟子は「舜と跖との分を知らんと欲せば、他無し、利と義との間なり」と言う。これを読む者の多くはいい加減に、分かり易いために一足飛びに、益々高遠に談じ、実行が伴っていない。いま子淵は、この義利の弁を理解し、しかもそこには順序が備わっていると云える。端緒が既に明らかで、方向も既に定まっていれば、善は明らかに義に喻り、日々進歩して、徳は明らかに、業は豊かになるはずだ。……（貴君の）書簡の末尾に、「善なれば速やかに遷り、

過ちなれば則ち速やかに改む」の句がある。これは元よりその通りだが、善と過ちとはすぐさま知り尽くせるものではないであろう。蘧伯玉のような賢人ですら、過ちを少なくしようとしたができなかつた。孔夫子のような聖人ですら、「我に数年を加え、五十にして以て易を学べば、以て大過無かるべし」である。『論語』に孔夫子が顔子の学を好むを称えたとあり、『周易』繫辭下伝に「其れ不善有れば未だ嘗て知らざるにあらず、之を知れば未だ嘗て復た行はず」と称えている。顔子が「不善有れば未だ嘗て知らざるにあらず、之を知れば未だ嘗て復た行はず」であつたのは、学を好んでこそである。いま子淵は「善に遷る」「過ちを改む」というが、そこにすぐさま知り尽くせるという意図はないであろう。けれどもその言葉遣いを見ると、軽はずみなところがある。私の意見はこのようだが、子淵はどう思うかね。(三)復来書、義利之弁、可謂明矣。夫子言、君子喩於義、小人喩於利。孟子謂、欲知舜与跖之分、無他、利与義之間也。読書者多忽此、謂為易曉、故躡等陵節、所談益高、而無補于实行。今子淵知致弁于此、可謂有其序矣。大端既明、趨向既定、則明善喻義、当使日進、德当日新、業当日富。……書尾、善則速遷、過則速改之語、固応如是、然善与過恐非一旦所能尽知。賢如蘧伯玉、猶欲寡其過而未。能。聖如夫子、猶曰、加我数年、五十以学易、可以無大過矣。論語載夫子称顔子好学、易大伝称其有不善未嘗不知、知之未嘗復行。顔子有不善未嘗不知、知之未嘗復行、乃自其好学而能然。今子淵所謂遷善改過、雖無一旦尽知之心、然觀其辞意、亦微傷輕易矣。愚見如此、子淵以為如何。」

『象山全集』卷六、「与傅子淵」一／76頁
 ここではまず『論語』、『孟子』における義利について論じられた箇所が引かれ、これを読む者の多くが「等を躡へ節を陵ぎ、談ずる所益ますます高くして、実行を補ふ無し」であると述べられる。すなわち学ぶ者の多くは、一足飛びに義に喩るといふ到達点を目指して、そこに至るまでの実践修養を蔑ろにしているというのであろう。

さらにここでは『周易』益卦・象伝「善を見れば則ち遷り、過ち有れば則ち改む」が議論の俎上に上げられる。これはもと傅夢泉の語「善なれば則ち速やかに遷り、過ちなれば則ち速やかに改む」を踏まえてのことであるが、これに対して陸九淵は「善と過ちとは恐らくは一旦に能く尽く知る所に非ず」と、その「速やかに」遷り改めるところに疑義を呈している。例えば聖人孔子ですら、五十にして『易』を学んで、ようやく過ちを無からしめることができたのであるから、過ちを改めるには、やはり長期にわたる学問修養が必要となるのである。

一方で楊簡は、以上で挙げた『周易』益卦・象伝「善を見れば則ち遷り、過ち有れば則ち改む」について、次のように述べている。

善を見ればすぐさま移ること、風雷の素早さの如くでなければならぬ。過ちがあれば改めること、風雷の素早さの如くでなければならぬ。このようであれば、益を得ることができ得るであろう。人には誰一人として善を好む心のない者はないが、自ら(善を)為し得ないと止めてしまうものは、往々にして多い。人には誰一人として過ちを改める心のない者はないが、自ら(過ちを)改め難いと止めてし

まう者は、往々にして多い。一体この二つの病弊は、いずれも意から起るものであり、その意は我に基づくものである。（見善即遷、当如風雷之疾、有過即改、当如風雷之疾、如此則獲益。人誰無好善之心、往往多自謂已不能為而止。人誰無改過之心、往往多自以難改而止。凡此二患、皆始於意、意本於我。）」『慈湖遺書』卷七、「汎論易」（また『楊氏

易伝』卷一四、益卦・象伝）／29丁表

ここでは『周易』の当該箇所が、風雷の語をもって説明される。もちろん風雷とは、益卦の象であるから、この語が持ち出されること自体はむしろ自然なことである。けれどもこれを疾速の象徴として、善に遷ること、過ちを改めることの疾（素早さ）に擬えるところに楊簡の解釈の特色が窺える。これは「善なれば則ち速やかに遷り」云々と述べた傅夢泉と立場を同じくするとも言えよう。

前節で述べた通り、陸九淵は「是なる者は其の是為るを知り、非なる者は其の非為るを知る、此れ即ち敬仲の本心なり」の一句をもって楊簡を啓発した。人は誰しも是なることは是であると判断しうる本心を有するのであるから、ここで楊簡が「人誰か善を好むの心無からん」と言うのも尤もなことである。ただ陸九淵に言わせれば、事態はかくの如く単純ではない。「善と過ちとは恐らくは一旦に能く尽く知る所に非ず」というように、本心の働きの善の善たることを知ったところで、速やかにそれに遷ることなど、そう簡単にできるものではないはずなのである。

これを要するに、陸九淵は出発点としての弁志を重視しながらも、それ以後の地道な実践修養を不可欠であると考えていた。

けれども傅夢泉にしろ楊簡にしろ、その段階を蔑ろにして速習を求める傾向が窺えた。ただ傅夢泉に限って言えば、「今子淵の所謂る善に遷り過ちを改むは、一旦に尽く知るの心無し」と、以上のような意向を、必ずしも持ち合わせていなかったとも言われている。想像を逞しくすれば、これが傅夢泉と楊簡との思想的差異であり、また陸九淵が傅夢泉を嘱望した所以ともなるであろうか。ただしその直後には、「其の辞意を觀るに、亦た微傷輕易あり」云々とあり、辞意（言葉遣い）における軽率さがあつたとは見なされていたようである。

（附）陳傅良との交流

また傅夢泉に関わりのあることとして、永嘉の陳傅良（君拳、一一三七—一二〇三）との交流がある。これらについては、以下の二つの資料を参照されたい。

傅夢泉（子淵）は衡陽に辿り着いた。その書簡を見ると、君拳と知り合ったという。傅夢泉の人品はとても優れており、諸氏とは比べ物にならない。（傅子淵已至衡陽、得其書、謂亦已相聞矣。子淵人品甚高、非余子比也。）」『象山全集』卷九、「与陳君拳」／128頁

（陸九淵）先生が聞いた所に拠ると、傅夢泉（子淵）と陳傅良（君拳）が切磋するうちに、陳傅良に疑いが起きてしまった。けれども黄日新（元吉）により、陳傅良は始めて傅夢泉の学を信じるに至ったという。（先生切問子淵与君拳切磋、又起君拳之疑。得黄元吉、君拳方信子淵之学。）」『象山全集』卷三四、「語録」上・182条、嚴松録／423頁

ただこれに関する陳傅良の側の資料はなく、陳傅良が傅夢泉の学を信じるに至ったというのも、事実か否かは疑わしい。けれども傅夢泉と陳傅良に交流があったこと自体は事実のようであり、例えば傅夢泉が陳傅良に宛てた書簡の断片は、陸九淵の語録中に見ることができる。

後日（傅夢泉が）陳傅良（君拳）に宛てた書簡を見ると、「是なれば則ち全く其の非を掩ひ、非なれば則ち全く其の是を掩ふ」とあったが、これは間違いである。また「節を闊くして目を疏くし、旨高くして趣深し」ともあった。「旨高くして趣深し」は素晴らしいが、「節を闊くして目を疏くす」は、傅夢泉の美点でもあり、欠点でもある。「後見其与陳君拳書中云、是則全掩其非、非則全掩其是。此是語病。中又云、闊節而疏目、旨高而趣深。旨高而趣深、甚佳。闊節而疏目、子淵好處在此、病亦在此。」『象山全集』卷三四、「語録」上・86条、傅子雲録／406頁

これに拠れば、傅夢泉が陳傅良に宛てた書簡には、「是なれば則ち全く其の非を掩ひ、非なれば則ち全く其の是を掩ふ」、及び「節を闊くして目を疏くし、旨高くして趣深し」の二句が見えたようである。そのうち前者は、ある一つの是や非によつて、その全体を論じているかの如き様子が窺え、善と過ちとを一旦に知り尽くそうとしている傾向があるとも言えなくはない。前述の通り、傅夢泉はその辞意（言葉遣い）に不注意なところがあったと見なされていた。ここで「節を闊くして目を疏くす」（細目を闊げ疏くす）ることが、その短所でもあるとされているのは、このような点を踏まえてのことなのかもしれない。

4. むすび

さて以上、極めて断片的な資料に頼りつつ、傅夢泉と楊簡という性格の異なる二人の人物を手掛りに、陸九淵初伝の門弟達の思想状況を把握することを試みた。

そもそも陸九淵は、たしかに自らの心に信頼を寄せる思想家であった。自己の心に信頼を寄せつつも、その一方で自らへの執着を戒めるといふ発想は、陸九淵やその門弟達に共有されていたと言えよう。そして以上のような考え方を持つが故に、陸九淵はまずは志が私利に向かうのではなく、公義に向かうよう求めるわけである。とはいえ陸九淵は、この志のみを問題とするわけではなく、その後の実践修養の段階も必要不可欠であると考えていた。もちろん出発点として、志す所を重視するのではあるが、以後習い、喻る所があつて、始めて学問は完成するに至るのである。

けれども傅夢泉にしろ楊簡にしろ、多かれ少なかれ、実践修養の段階を蔑ろにして、速習を求める傾向があつた。これは明らかに陸九淵その人の思想からは逸脱したものであり、現に陸九淵は傅夢泉に対して苦言を呈していた。

なお陸九淵の兄九齡もまた、学ぶ者達が速習に流れることを警戒していたようである。陸九齡の著述は、現在まとまった形では伝わらないが、宋末元初の黄震『黄氏日抄』に、奇しくも傅夢泉その人に宛てた書簡の断片が収められている。

傅夢泉に答えた書簡「近頃の学ぶ者の多くは、自ら速きを欲する病があり、また仏者の一足飛びに悟入する談に惑わされ、往々にして日用を捨てて心を論じ、倫理を捨てて道

を語っている。」「答傳夢泉。近来学者、多自私欲速之病、又惑於釈氏一超直入之談、徃徃棄日用而論心、遺倫理而語道。」「黄氏日抄』卷四二、「陸復齋文集』／五・149頁
ともすれば陸九淵は、ひたすらに自らの心に信賴を寄せる思想家と見なされる。けれどもこの心を重視するあまりに、実践修養を蔑ろにすることなど、決して許されるものではなかった。そもそも陸九淵の門弟達に対する視線の中にも、右で陸九淵が述べているような「速きを欲す」ことや、「日用を棄てて心を論じ」ることへの危惧があったはずである⁷。

注

1 「楊敬仲不可説他有禪、只是尚有氣習未尽」(『象山全集』卷三五「語録」下・91条、包揚録／47頁)、「我不説一、楊敬仲説一、嘗与敬仲説箴他」(同卷三五「語録」下・222条、包揚録／459頁)。

2 傅夢泉については、『宋元学案』卷七七・槐堂諸儒学案、楠本氏「一九六二」(367頁)、徐紀芳氏「一九九〇」(34頁)、趙偉氏「二〇〇九」(212頁)等に、僅かながら言及がある。

3 筆者の陸九淵理解については、拙著「二〇一四」を参照。本稿は、陸九淵の門弟評価を手掛りに、陸九淵自身の思想を再確認する試みでもある。

4 陸九淵の艮卦をめぐる議論については、楠本氏前掲書(343頁)344頁)、土田氏「二〇〇四」等も参照されたい。

5 牛尾氏「一九七五」、また「一九八〇」等参照。

6 「又曰公私、其实即義利也」(『象山全集』卷二、「与王順伯」)、

「凡欲為学、当先識義利公私之弁」(同卷三五「語録」下・333条、詹阜民録／470頁)など。

7 本稿では、陸九淵の門弟として傅夢泉と楊簡を取り上げるに止まった。けれどもその他、比較的資料が現存している門弟に袁燮、沈煥、舒璘らがいる。楠本氏は前掲書において、傅夢泉は「斬釘・截鉄の趣がある」、楊簡は「澄明な境地を望んでいた」、袁燮らは「二層着実な功夫を求め」ていたと、陸九淵初伝の門弟達の思想傾向を三分して考えているようである(367頁)。これに拠るならば、あるいは袁燮らには実践修養を必ずしも蔑ろにしない傾向があったということになるであろうか。とりわけ袁燮については、市来氏「一九九三、のち二〇〇二」や、陳莉萍・陳小亮氏「二〇一二」などの専著專論もある。彼らの思想を分析した上で、それを陸門の中で如何に位置付けるかは、筆者の今後の課題としたい。

参考文献

【一次資料】

『象山全集』(鍾哲点校『陸九淵集』、中華書局、一九八〇年一月)

『慈湖遺書』(『四明叢書』所収)

『朱子語類』(王星賢点校、中華書局、一九九四年三月)

『黄氏日抄』(『黄震全集』、浙江大学出版社、二〇一三年九月、所収)

【研究書・研究論文】（敬称略）

- 市来津由彦「一九九三」「南宋朱陸論再考 浙東陸門袁燮を中心として」（『宋代の知識人 思想・制度・地域社会』、汲古書院、一九九三年一月）
- 「二〇〇二」 『朱熹門人集団形成の研究』（創文社、二〇〇二年二月）
- 牛尾弘孝「一九七五」 「楊慈湖の思想 その心学の性格について」（『中国哲学論集』 1、所収、一九七五年一〇月）
- 「一九八〇」 「『絶四記』 訳注」（『国語の研究』 11、所収、一九八〇年五月）
- 楠本正継「一九六二」 『宋明時代儒学思想の研究』（広池学園出版社、一九六二年一月）
- 徐 紀 芳「一九九〇」 『陸象山弟子研究』（文津出版社、一九九〇年四月）
- 趙 偉 「二〇〇九」 『陸九淵門人』（中国社会科学出版社、二〇〇九年八月）
- 陳莉萍・陳小亮「二〇一二」 『宋元時期四明袁氏宗族研究』（浙江大学出版社、二〇一二年七月）
- 土田健次郎「二〇〇四」 「『万物一体の仁』 再考」（『宮沢正順博士古稀記念 東洋 比較文化論集』、青史出版、二〇〇四年二月）
- 拙 著 「二〇一四」 『陸九淵と陳亮 朱熹論敵の思想研究』（早稲田大学出版部、二〇一四年一〇月）

Abstract

This paper focuses on the philosophies of Fu Mengquan and Yang Jian, who were Lu Jiuyuan's immediate pupils and had the different character. Fu was most expected by Lu, but his name was not known in history. Yang was not praised by Lu, nevertheless his influence to coming age was huge. This paper mentions their relationship with Lu, understands the state of Lu school from various angles. Incidentally, Fu's complete works are not extant, there is only the fragmentary text. This paper examines Fu's fragmentary text, then compares this with Lu and Yang's writings. Consequently, this paper reveals that Lu and his pupils had the common ideas, which trust own mind and resist self-interest. On the other hand, Fu and Yang frequently neglected to make steady progress, such an attitude was a departure from Lu's philosophy. Lu's pupils actually were criticized for making rapid progress.